The University of Osaka
Institutional Knowledge Archive

Title	自然保護の変遷 ： ドイツ郷土保護運動を中心に
Author(s)	高橋, 真樹
Citation	年報人間科学. 2004, 25, p. 167-182
Version Type	VoR
URL	https://doi.org/10.18910/6305
rights	
Note	

The University of Osaka Institutional Knowledge Archive : OUKA

https://ir.library.osaka-u.ac.jp/

The University of Osaka

自然保護の変遷――ドイツ郷土保護運動を中心に――

高橋　真樹

〈要旨〉

十九世紀ヨーロッパには、様々な社会運動が自然の問題に取り組んでいた。郷土保護運動もその一つであり、自然天然記念物の保護を目的としていた。しかし十九世紀後半になると、自然天然記念物に寄与してきた博物学が衰え始める。博物学が次第に専門分化し近代自然科学へとその姿を変えていくと、市民階層の間で博物学ブームはその勢いを失うのである。しかしながら他の自然保護運動を含め郷土保護運動の主な担い手は教養市民階層だったのである。では総じて、産業化により変容した地域の景観や失われてきた自然はどのように疑問視されてきたのであろうか。

まず郷土保護運動において見られた言説、とりわけその創始者であるH・コンヴェンツとE・ルドルフの言説を基に、自然破壊が問題視される過程を考察してみたいと思う。そして自然保護がより広範囲にテーマ化されるためには、自然についての知的興味だけではなく、近代化の過程において失われてきた自然への伝統的な美意識や懐古的かつ文化的なアイデンティティーが重要な位置を占めていたことを示したいと思う。しかし徐々に自然保護の実践は自然科学的な基盤や近代的な技術を拠り所とするようになるのであり、郷土保護運動は単なる反近代的な動向ではなく、それ自体が近代化の途をたどってきたことが示されるだろう。そして重要なのは、社会運動の変容過程を考慮しつつ、その自然に関する思想的側面を把握することである。

キーワード

郷土保護、自然、美、自然科学、近代化

はじめに

十九世紀ドイツにおける自然をテーマ化した社会運動は、様々な切り口から検討する事が出来る。労働運動における自然についての言説、菜食主義やアナーキズムの運動による入植活動の理念に含まれる自然の概念、ワンダーフォーゲルや郷土保護運動が強調する美的対象としての自然の姿、などである。現在では、地球環境問題として自然の問題は大きくクローズアップされているが、かつてのプロイセンという時間的にも空間的にもごく限られた時間に焦点を当ててみても、関心の違いはもちろんあるものの自然の問題が大きく取り上げられていたのである。

本論文の目的は、このうちの郷土保護運動 Heimatschutzbewegung に焦点を当て、そこで取り上げられていた自然の概念の言説を分析することである。社会運動の理念や実践を基に、ドイツの自然に関する思想史的な側面を探ることも可能である。そのためにまず郷土保護運動を創設した主要人物である、特にプロイセンの天然記念物保護 Denkmalpflege に尽力した博物館員であったフーゴ・コンヴェンツ（Hugo Conwentz）とベルリン王立音楽大学教授を務めていたエルンスト・ルドルフ（Ernst Rudorff）がこうした活動を行うに至った経緯や彼らが影響を受けたそれ以前の自然保護 "Naturschutz" が含んでいた意味を、その歴史的背景と照らし合わせながら概観することが必要である。それ以前に読み取れる自然への関心は、十八世紀以降ブームとなった博物学への知的興味として描く事が出来るが、この博物学において増大してきた自然の知識とその後の郷土保護の活動との連続性と非連続性を検討することも重要である。また郷土保護運動は、むしろ文化の保護というニュアンスが強い活動であり、伝統的な生活様式の維持や地域の民族衣装、建築物の保護など幅広い領域に及ぶものであるため、自然保護の発想と郷土保護運動との結節点や自然保護が郷土保護運動に内包されていた背景を探る必要があるだろう。そして最後に、様々な立場の人間から成り立っていた郷土保護の性格とその変容について、特に具体的な言説を取り上げながら捉えたいと思う。

1、自然への眼差し

十八世紀中葉から十九世紀にかけて、ヨーロッパでは上流階級及び一部の知識人により博物趣味がブームとなる。植物の観察や採集、化石の収集、昆虫の標本作りなど、自然への関心が高まってきたわけであるが、これらの活動により、自然は知的好奇心の対象として、それまでのアリストテレスなどの伝統を引き継ぎながらも学問的な価値を与えられたのである。博物学は植物学、動物学、地質学といった、現代の自然科学の分野の前身であり、当時様々なアカデミックな協会や学会、博物館が各地に創設されてきた。特にスウェーデンのカール・リンネやフランスのジョルジュ・ルイ・ビュッフォンらが繰り広げた動植物に関する分類及び体系化の議論は有名である。

博物学者達は、国内及び地域に見られる動植物を観察・採取してはそれらを命名し、数え切れないほどの種類の生物種を分類したが、こうした試みは市民の間にも広まったのである。さらにその知的好奇心は自分の住む国や地域のみならず、国境や海を超え、国を挙げての探検航海が行われ、民間団体による探検も行われた。特にプロイセンのアレキサンダー・フォン・フンボルトによる中南米への航海をまとめた報告書 Voyage は広く読まれた。(1)

十九世紀序盤では、まだ自然保護 Naturschutz という発想は人々の間に広くは定着していなかった。自然を保護するという発想は十九世紀の中盤頃から徐々に現れてくるが、その関心の拠り所は博物学的な好奇心や体系化の知識である。ヴァルター・シェーニヒェン（Walter Schönichen）は、天然記念物という概念は樹木の保護 Baumshutz の発想に負う部分が多い事を指摘しており、この樹木の保護は、ゲルマン民族が崇拝していた樫 Eiche をはじめとした古来の文化的な伝承による知識やホフマン・フォン・ファーラスレーベン（Hoffmann von Fallersleben）の詩で描写されているような自然への配慮が基となった概念であると指摘している。しかし、樹木保護のように種々雑多な樹木を把握しその目録を製作するためには、上述したような博物学の発展による植物種の同定が前提でもある。ハインリッヒ・クリスティアン・ブルクハルト（Hein-rich Christian Burkhardt）は十九世紀のハノーヴァーの森林官であり樹木保護のパイオニアの一人であるが、森林への美的関心をきっかけに、ザクセンの森林の天然記念物のリストを一八五三年に作成し、それぞれの成長具合を観察し、森林の管理に寄与した。さらにブルクハルトにより、一八七五年には「芸術・歴史・自然天然記念物研究のための委員会」が設立された。(2) また一八七九年以降には、地理学者であり国立博物館の館長でもあったアルフレット・イェンチュ（Alfred Jentsch）が、東プロイセンの地質や植物の観察のための散策調査を行い、一連の博物館運営に寄与した。こうして天然記念物という概念は徐々に人々の間に浸透してきたのである。

このように博物学的な興味の延長上に天然記念物の概念が位置づけられるが、天然記念物は専門家による学問的な価値として対象化されていたといえよう。特に十九世紀後半になると、博物学は近代生物学へと徐々にその姿を変えていき、生物学における分野の細分化や高度化が進んでいく。市民層における博物学的興味は徐々にではあるが衰退し始めていたのである。ヴォルフ・レペニースの言葉を借りるならば、自然誌に内包されていた寓話が追放される事で自然誌は進展してきたわけであるが(3)、生物及び生命現象への実験科学的な色合いが強まり、リンネやビュッフォンのような大きな体系的な理論ではなく、個々の細かい側面を分析する科学へと変容したのである(4)。天然記念物は、博物学のような分類と標本収集だけではなく、地域の固有性や特徴を表すような動植物・鉱物の類、あるいは珍しいと見なされる生物種というような、文化的な遺産という意味合いも帯びていたのである。まさに先に述べた樹木の保護 Baumschutz には、特定の種（グループ）の保護を知的な遺産として重要視する発想が込められているのである。

十九世紀に差し掛かる頃から、国益のために森林の生産はその重要性を増していくが、樹木の保護 Baumschutz は森林の管理の一環として位置づけられる森林保護 Forstschutz の発想とは区別されるものである。森林保護 Forstschutz は、木材の生産を潤滑に行うための、例えば害虫駆除や自然災害に対する管理区に置かれている森林の保護、という意味を含んでいる。生産性が重要視され、森林の管理が国家機関の基に置かれ制度的な分化が進むにつれて、この二つの保護の概念の相違が一層顕著になるのである。

では自然保護という発想が大きく認知されるようになる過程はどのように考える事が出来るであろうか。コンヴェンツも一八八〇年以降、博物館の係員として主に西プロイセンの標本採集、展示場の設定、指導・教育、目録作成、アンケートの実施、博物館の機関紙の発行などに努めた一人である。以前の博物学者と同様に、様々な地域へと赴き、動植物種の同定・発見・採集を行ったが、彼の時代にはすでに自然の姿は変容しつつあったのである。開発により生息数が激減してしまった種、生息地が奪われ限られた地域でしか見られなくなっている種、また観賞用として主要都市で消費される花々、羽毛や装身具目当てで捕らえられる種々の動物種、というように彼の目に映ったのは自然の荒廃的な状況だったのである(5)。

近代化の過程で変容し失われてきた生物種や自然的空間の問題の浮上により、地域の固有性や特徴を表すものとして重要視されてきた天然記念物を保護するという発想は非常に認知されやすいものであった。自然破壊が大きな問題として浮上するのは、天然記念物の保護という動機から説明する事が可能である。しかし郷土保護運動には、天然記念物の保護を自然破壊の対抗手段とする発想をより強化するようなそれとはまた別の発想が含まれていたのであり、これがこの運動の大きな特徴ともいえるのである。つまりコンヴェンツのように、幼い頃から自然に興味を持ち、生まれ育ったダンツィッヒ周辺の動植物と常日頃から接していたという点は、確かに郷土保護という発想と結びつきやすいと言えるわけであるが、人々の間に広まるためには博物学的な自然に関する知識を前提とすることの他にも別の要素があったと考えられるのである。次に郷土保護運動の歴史的経緯とその言説を探る事でその点を考察してみたい。

2、郷土保護運動の歴史的概観

イギリスやフランスに後れを取りつつも、ドイツでは十九世紀中盤以降、目覚しい産業化や経済発展を遂げ、それと同様に都市化も進行してきた。平野は開拓され、鉄道・鉄橋による交通や輸送経路が発達し、工場などその他多くの建設物が並び、田園地帯はこれまでにないほど縮小した。それに伴い工業団地では廃棄物が増大し、空気・土壌・河川は汚染されてきた。そうした中で、劣悪化する都市環境に背を向け、田園地帯での生活を実践しようとする生活改善運動 Lebensreformbewegung が各地で広がり、菜食主義やヌーディズムなどの様々な団体が形成されていた。それらはこうした近代化への反動的な潮流であり、この郷土保護運動もその例外ではな

かったのである。(6)

「郷土保護」という言葉は、ルドルフが一八九七年に雑誌 Grenz boten に寄せた論文によって人々に認知されるようになったが、それ以前から彼は様々な団体に景観の保護に関する活動を盛り込むように働きかけていた。ウィリアム・H・ローリンスによれば、ルドルフの郷土保護の基となる構想は、一八八〇年の Preussische Jahrbucher の記事から見出す事ができる(7)。その後ルドルフは、実践的な活動を模索する中で、例えば一八八八年には「ドイツの歴史・文化遺産協会 Gesamtverein der deutschen Geschichte- und Altertumsverein」に、また一八九二年には「ドイツ総合協会 Allgemeiner Deutscher Verein」などに、景観保護の活動を提案し続けていたが、その努力はすぐには実らなかったのである。

しかし一九〇〇年前後を境に、ルドルフが構想するような郷土保護への関心が高まってくる。一八九八年にはハノーヴァーで、ニーダーザクセンの郷土連盟が成立し、また一九〇二年にはバイエルンに民族芸術及びフォークロアに関する協会が設立された。ルドルフは Grenzboten において、ドイツの文化や伝統といった要素を強調する事で、それ以前から存在していた文化遺産保存関係の協会や人々から注目を集めたのである。彼らが特に関心を持つのは、それぞれの地域の固有性・特徴を保護すること、並びに地域の伝統を保存することであり、ルドルフは景観や自然の保護をそうした文化の保護活動の一環として位置づける事に成功したのである。(8)

こうして一九〇四年にはドレスデンにおいて「郷土保護連盟 Bund Heimatschutz」が設立した。この運動は主に歴史などに関心を持つような市民階層(行政機関の職員、教師、聖職者、芸術家、ジャーナリスト等)から支持されており、さらに一九一四年には二十五を超えるまとまった地方協会ができ、会員も三万人を超えるなど、特に第一次世界大戦ごろまで急激に拡大してきたのである。(9)

こうした背景から、郷土保護運動は「自然史的・歴史的にできあがった特性を踏まえたドイツの郷土を守る」という文化的な意味合いが非常に強い運動である事が分かるが、活動の範囲は都市計画の建築物の保存、田園生活の生活を強調して描いた文学作品の出版、人里離れた平原や荒野に美を見出し、伝統的な習慣が残る農村の風景を保存するなど幅広いものであった。郷土保護連盟による根本的な活動の指針としては次の通りである。①文化財の保護、②受け継がれてきた田園地域・庶民的な建築物の保護(現状の維持)、③廃墟を含む風景の保護、④それぞれの土地の動植物並びに地質学的な特徴の維持、⑤運動が対象とする民俗芸術、⑥習俗・建築物・祭・服装の保存。(10) 自然保護の問題は特にこうした文化の保存という課題に内包される形で人々の共鳴を得ていたのである。

運動が政府へ働きかけながら達成してきた成果も、それぞれの地域ごとに様々である。例えばヘッセンの法律では、一九〇二年に天然記念物の対象が指定された。その対象は、地質の形状、小川や河川、岩石、森林などであり、歴史的あるいは自然史的に考慮され、また景観的な美や固有性があるものとして一般的に関心をもたれるものが含まれるとされている。(11) 法律の制定時期やその詳細は、

州や地域ごとに様々であるが、この法律により土地利用に制限がなされたり、土地利用が必要な場合は郡や地域の役所の承認を得なければならない場合もあった。またこうした行政による制限と個人の土地所有者との緊張関係も見られた。[12] このように一九〇〇年以降には徐々に郷土保護や自然保護の要求が法制度に反映され、一九一九年のワイマール憲法には「文化財・天然記念物および景観的記念物は国家の保護と管理を受ける」という内容が盛り込まれたのである。

3、自然をめぐる言説

上述したように、郷土保護運動は様々な関心を持つ人々から成り立っていた運動であるが、この運動に内包されていた自然の保護の問題の性格を把握するためには、自然の概念がどのように取り上げられていたかを分析する必要がある。ヨーロッパの対自然関係を理解するためによく用いられる枠組みは、自然に対する美的態度と自然を機械的に分析する見方である。近代化の過程においては、この二つの自然との関わり方が非常に先鋭化してきたと言われている。例えばヨハネス・ヴァイスは自然を科学により客観的にかつ機械論的に捉える啓蒙主義的な態度に対して、自然現象に主観性や生気を見出すロマン主義的な自然観を対置させている。[13] また歴史家のキース・トマスは、自然への感受性が増大した結果、対自然関係において生じた人間のジレンマとして「都会か田舎か」、「開拓か荒野か」、「征服か保存か」、「食用か慈悲か」という対立図式を用いて当時のイギリス社会を分析している。[14] 社会学者のクラウス・エーダーは、支配的な文化と対抗文化（肉食文化と菜食文化）という二つの流れに着目して近代ヨーロッパの対自然関係を分析し[15]、「自然との融和」や「身体と自然との調和」といった言説はオルタナティブな社会運動の大きな特徴の一つとして強調している。[16]

こうした対自然関係の違いは、自然の支配を増大させ近代化を促進させる流れと、自然との感性的な関わりを重視する反近代的な潮流として捉える事ができ、総じて自然保護運動はこのうちの後者に属するものとして捉えられがちである。しかし郷土保護運動という様々な立場の人からなる複雑な現象を、〈近代／反近代〉という静的なものとして捉えることは不適切なように思われる。郷土保護運動の性格を固形化させるのではなく、運動それ自身が近代化という現象をどのように捉え、また近代化の影響を受けながらどのように変動してきたかを把握する事が重要であろう。

（1）共鳴器としての美・伝統への関心

市民階層の間で一大ブームとなった博物学趣味は、十九世紀後半には衰退してきたことはすでに述べたとおりであるが、近代化に伴う都市化の拡大や平野の開拓の進行により「失われていく自然」をテーマに自然への関心は徐々に呼び覚まされていった。しかし自然保護としては、先に見た樹木の保護 Baumschutz に見られるような天然記念物として、つまり生物種の危機は主として学問的な価値

から問われていたのである。さらに産業の発達に伴う鉱毒煙による被害に対する運動は局所的には生じていたものの、それらを大きな問題として捉えていたのは主に一部の専門家や公務員だけであった。[17] 市民階層が自然保護の関心を持つためには、ルドルフが働きかけたように、急激な近代化で失われていく文化的な要素をテーマ化する必要があったのである。レペニースが、十九世紀において自然誌は諸科学ではなく文学において生き延びた事を、「自然誌の延命」の一つの現象として捉えているが[18]、自然への関心は文化への意識を土台として別の形でテーマ化されるようになったのである。

ルドルフは、その生まれ育った環境により音楽に非常に精通しており、グルックやベートーベン、さらにはヴェーバーのオペラ等に熱中していたが[19]、こうした感性は音楽にだけ向けられたのではなく、彼が幼少の頃に馴れ親しんだ動植物へも注がれたのである。特にヴェーザーベルクの風景の美に深い感銘を受けるなど、彼の郷土への愛着は音楽に見出せるロマンティックな側面を景観の美と結びつける事で尚一層強固なものとなったのである。土地の開拓を促進する合理主義や産業化は、彼の目にはこうした文化的な喪失として映ったのである。

すでに十九世紀の半ば頃には、民俗学の祖であるヴィルヘルム・ハインリッヒ・フォン・リール（Wilhelm Heinrich Von Riehl）により、産業化の発展に伴う自然の開拓は社会の退廃として描かれており[20]、ルドルフもそうした考えに沿っていた。ルドルフが伝統的な農村風景に着目したのも、農村のしきたりや社会的規範の存続にとって、自然の土と農民の結びつきを重要なものと見なしたためである。また彼は、十六、十七世紀から徐々に始まり、十九世紀に大きく推進された農地改革の一つである土地の分割的所有政策 Verkoppelung に対しては批判的な態度を取るが、それはこうした伝統的な農村の風景の喪失や河川の直線的な工事、森林の収益増加を中心とした利用に対する抵抗であった。ルドルフは一八九七年の Grenzboten において特に伝統の喪失を問題としている。

「ブラウンシュバイヒ、ハーメルン、ヒルデハイム、ハルバーシュタットなどのような都会は、嘆かわしい例といえよう。その反面、テュービンゲンの事例は模範となるべきものである。というのも、そこでは行政によって、都市の遺産地区での建設は禁止されており、またそうした建築様式や生活環境を維持することでその近郊を画一的にさせないのである」[21]

「Verkoppelungen によって共有地は共同作業によりに次のようになっていった。牧草地と共に牛飼いや家畜の群れが消え去り、風景の元来の美しく生き生きとした姿は失われ、不健康な家畜小屋が牧畜として使われていた自然環境に取って代わるのである」[22]。

「元来、特にオーク材と強く結びついていたドイツ固有の建築

様式は瀕死に陥っている。同時にまた木材産業はすっかりその本質的な基盤を失っているのである」[23]

また郷土保護運動で活躍し、その議長として選ばれたパウル・シュルツェ＝ナウムブルク（Paul Schultze-Naumburg）は、手付かずのままの原生林や保存された平野、人間の生活風景、建築物等の美を追求し、その維持の重要性を近代化の過程で変容していく風景の姿と対置して次のように述べている。

「個々の人々だけが自然によってその最も輝かしい時を過ごすのではない。国家もまたその内部に健全性を保つべきならば自然の美が必要なのである。祖国への愛がより良くしっかりと育まれるのは、あたかも大都市の固い舗装道路や殺風景な防火壁が打ち砕かれるかのように、森林や野原や草原が繁栄する時である」[24]

「生活が生み出す芸術にとって次のことは見過ごす事のできないものである。それは、今日のドイツはその一般的な特性を非常に広大な領域を占めている農業によって保持しているという点である。…また次のように主張する事もできるだろう。それは土地を農地へと開墾する事はドイツ的な景観を持続させる事に繋がる、と。」[25]

前近代的な社会から産業社会への移行に伴い、農村から都市部へと人々の移動が顕著になり、伝統的な生活習俗が喪失していく。そうしたことと開拓による自然空間の喪失とがパラレルな関係として描かれていたのである。郷土保護運動には多くの作家も参加していたが[26]、そのうちの一人であるアドルフ・バルテルス（Adolf Bartels）は主として十五世紀から十八世紀の農民の姿を美化し文化史として描き、そこに近代化や都市化に伴い失われていくドイツ的な特性・感性を強調している。

「しかし今日では、慣習を含めた国土の広大な都市化や農村の風景が痕跡に過ぎないものとなっている事は嘆くべきことであろう」[27]

「時代の動きは明らかに産業発展的なラディカリズムに反発しているのであり、何世紀もドイツの農民階級が尽きることなくドイツ国民の力の土壌となることが期待できるであろう。」[28]

ここから郷土保護運動には反近代的な側面が含まれていたことがうかがえる。ルドルフも主張していたように、ドイツ的な詩や音楽の創出にとって重要と見なされたものは、他ならぬ伝統的な生活風景と一体となった景観なのである。自然に関しても同様にドイツ的なもの、あるいは地域やその土地に固有な性質のものが強調されていたのである。

「他のどの言語もドイツ語の「郷愁 Heimweh」を翻訳できないであろう。その言葉は大都市ではなくドイツ的な農村で生まれたのである。人々はその言葉を質素な村の教会に見出し、またそれは村の小川のせせらぎからもれてくる。またそれは黒褐色の屋根の灰色の煙と共に見出せるのであり、ドイツの夕焼けと共にある。国民の感性は、郷土を失うことよりも酷い運命を知らないのである。」(29)

自然破壊の問題は、急激に進行した産業化や都市化により失われたと見なされる古き良き過去を媒介にしてテーマ化されていたのであり、郷土保護運動には非常に保守的な側面が含まれていたことがうかがえる。コンヴェンツはこうした文化的な側面を特に重要視したわけではなかったが、地域に特有な失われつつある生物種・あるいは失われた生物種を天然記念物としてその保護を提唱していたため、天然記念物と地域性（郷土）概念との結節点が考えられよう。しかし同時に自然の機能を捉える科学的な観点も存在していたのである。

（2）相互補完関係にあった自然の機能を強調する立場

ルドルフの立場は非常に保守的なものであったが、反近代的な態度を貫いていたわけではなかった。雑誌 Grenzboten への彼の寄稿は、一八九七年に二度行われており、その二回目の論文は、一度目の論文への批判に対するものであることが分かる。一度目の論文では上述したように、自然の保護をもっぱら文化の保存や美的な関心から主張していたのに対し、二度目の論文では自然を保護することの意義を、土壌の機能や衛生など、自然科学的な観点から提唱しているのである。例えば河川の直線的な工事に対して、工事を終了した直後に乾燥する土壌の状態に気づかうことを提唱したり、あるいはチスフやジフテリア等の例を引き合いに出しながら、河川工事後のその場しのぎではない安全措置を施すことの重要性を指摘している。郷土保護運動の理念は単なる耽美主義的な関心だけでなく、近代化の過程で得てきた科学的な観点を内包する事で、これは徐々に見えてくる点であるものの、近視眼的な経済的発展に対する議論に取り組む事ができるようになるのである。つまり、郷土保護運動がナショナリズムや退行的な態度を含んでいるという批判を受けることで、美的関心とは異なる新しい批判を投げかけるようになる。そうして運動のプロジェクトは変容しながらも進んでいくという過程が示されるのである。

「あまり好ましくない進路からはずれた所に設置された木材用運搬道路のあちらこちらに、多くの湿った平地を切り開いてできた木材運搬道路は、当然のことながら乾くことも水脈が豊富であるはずもなくそれらが重なり合う斜面に大雨が降ろうものなら、たちまちその下流の土地は絶えず砂礫を流す洪水被害に悩まされることであろう」(30)

「次のような実用的な不利益はなかったのであろうか。すなわちそれは、Verkoppelung が総じて取り除いてしまった生け垣・個々の藪・森林と共に、防風林（と機能していた樹木草本）や害虫を食べてくれていた鳥類の繁殖地をも消し去ってしまったという点である」[31]

しかしながら、このような森林の保水機能や防風機能、さらには土砂崩れを防ぐ機能を重視する見方は、それ以前の自然保護の構想、例えばすでに述べたような樹木の保護 Baumschutz や十九世紀後半の動物学や植物学の専門家によってすでに観察されていた内容でもある。フライブルク教授で一八九九年に設立したシュトゥットガルトの鳥類保護連盟 Bund für Vogelschutz の中心的役割を果たしたコンラート・ギュンター（Konrad Guenther）は鳥類の保護の意義を害虫駆除の側面から次のように評価している。

「およそ肉食性の鳥類で有益なものといえば、チョウゲンボウ、ノスリ、フクロウである。……一一二二のノスリのうちおよそ七〇パーセントが衰退し、ライチョウでは九三パーセントが同様の状況である。狩猟地区の森林では、ノスリの七パーセントだけが生存しており、そこではたいていそうした森は開放されているか木々の病が問題になっていると考えられる」[32]

また、当時の林業の変容との関わりも指摘する必要があるだろう。森林学者のカール・ハーゼルは、十九世紀を一つの境目として森林の利用形態が大きく変化してきた事を指摘している。十九世紀以前、特に中世のドイツでは、広葉樹が広く分布しており、森林は工業や家庭での薪材を主に供給していたが、化石燃料の使用が増大し、技術的な発展が進むことで薪材の需要は大幅に減少の途をたどるのであった。森林の外観も大きく変容し、十九世紀以前にはブナなどの広葉樹とトウヒを主とする針葉樹の構成比は地域により様々であるがおよそ八対二程度であったものが完全に逆転したといわれている。[33]

こうした針葉樹の拡大は、伝統的な森林の利用方法が廃れ、森林そのものが衰退した結果に講じられた植林によるものである。それと加え、産業が発展するためにはこれまでにないほどに用材が必要とされ、木材の生産性が重視され、広葉樹よりも生産効率の良い針葉樹が国家の経済的関心により奨励されたためでもある。これは経済合理主義的な対自然関係を示すものである。林業経済にとって重要なのは、利益をもたらす自然であり、生産効率を上げる持続的な森林の活用が追及された。こうした森林の様相の変容が十九世紀以降に特に顕著に見られたのであり、森林は単調な木材工場と化してしまったと言われている。[34]

こうした中で、騎士領所有者であるハインリッヒ・フォン・ザーリッシュ（Heinrich von Salisch）は針葉樹と広葉樹の混交林を構想し、『森林の美学（Forstasthetik）』の中でそれを展開した。

つまり林業や森の管理の実践に美の視点を加えようとしたのである。それに加え重要なのは、混交林における美的な側面と木々の育成具合やそれぞれの土地の土壌や気候との関係性を結びつけたことである。例えばテュービンゲン大学教授のハンス・ベルンハルト・ヤコビ（Hnans Bernhard Jacobi）は、従来の数多くの森林学者たちの研究を踏まえながら、広葉樹林の減少及び針葉樹林の拡大について考察している。彼は森林学者のラム・シュヴァルツヴァルト（Ramm Schwarzwald）を引用しつつ次のように語る。

「広葉樹林が含まれない針葉樹林種の脆弱さとは、根本的に次のようなものである。すなわち針葉樹林の植林がもたらせた乾燥した泥炭層は、土壌と造林への悪影響を与えるため、針葉樹林の存続は様々な観点から疑問に付される、ということである」[35]

林業や森林の管理の専門家の間から、森林を効率的に利用するという林業経済学的な観点を超えた、美的な関心に基づく批判が投げかけられたが、それは耽美主義的な側面だけを持つものではなかった。彼らの批判は、針葉樹林だけを造林するという近視眼的な収益論をも覆すような樹木の生長や長い目で見た際に重要になる森林の土壌の状態を予見する視点であった。しかし、森林科学の分野においてこうした美の理論が大きく展開される見込みはほとんどなかったのである。

4、郷土保護運動と経済的関心

郷土保護運動は、反近代的な側面を持ってはいたが、産業や経済的発展を否定的に捉えていたわけではなかった。無論、開拓を促進する動きとその空間を保護する立場とが対立することもあったが、経済的な関心に真っ向から対立するものでは決してなかったのである。むしろその両方の利害をどのように考慮するかを模索している。テュービンゲン大学の経済学教授のカール・ヨハン・フクス（Carl Johann Fuchs）は次のように述べている。

「我々の活動には、強い経済的な関心が対立する場面においては大きな困難が生じるであろう。我々はこの困難にしっかりと眼を向けなければならない」[36]

特にラウフェンブルクの水力発電所建設については大きな議論となっていた。その他にも、こうした急流の河川や滝のある近郊には、カーバイド工場、セルロース工場、石油工場などの様々な工場が建設され、天然記念物に指定されていた地形や風景の多くがその姿を変えていったのである。

「我々はまた次のことを付け加える事もできよう。それは、今日の状況において、安価な水力の利益を得ることによるドイツ産業の発展は、国家的な進歩を意味するのである」[37]

コンヴェンツは風景や動植物の保護のみならず、それ以前から起こっていた公害の問題をも強調しているが、やはり経済的発展に関しては肯定的な立場をとっている。それは技術の発展を通じて、こうした問題を解決できると見込んでいたからであり、自然破壊を避けるような発展を成し遂げていけるような産業化を構想していたのである。現在言われている所の「持続可能な発展」と似たような構想といえよう。

「無論、全体として産業はそうした自然のエネルギー（水力発電など）の使用を制限されるべきではない。しかし時には次のような工場設備を導入する事も可能であろう。それは自然の美を全体あるいはほとんど損なわないようにするものである。またさらに国内のそれぞれの滝や急流の個所をその周辺を含めて工場の利用を禁止して、元来の状態として保存させることを願いたいものである」[38]

これと合わせて指摘しておきたいのは、フクスもコンヴェンツも、当時の国内の繁栄としての経済的発展には関心を向けていたわけであるが、自然保護の重要性については国内だけの利益を越えた国際的な枠組みでの実践を構想していたという点である。郷土保護運動は地域の文化的特性の保持を大きなテーマとしていたが、自然保護の理念は文化的なアイデンティティーを超えるような思想への高まりを見せていたのである。第一次世界大戦までに二度にわたる郷土保護をめぐる世界会議がパリとシュトゥットガルトで開催されたことはまさにこの点の表れである。[39] 一八九五年のパリにおける会議では、農業に関する有益な鳥類の保護のための一般的な措置の導入が論点であったし[40]、さらにコンヴェンツが後世の人々のために自然を維持する事の重要性を掲げている事も指摘すべきことでもある。またフクスはすでに国際的に取り上げられる「郷土保護」という名称の矛盾を指摘していたが、郷土保護の意識は自国の文化並びに他国の文化の理解を深めるための手段となるという点で評価していたのである。

ここでは触れる余地はないが、郷土保護に内包されていた自然保護の発想はこのようなナショナルな関心を超える側面があったにもかかわらず、後のナチスの政策により戦後は特にネガティブなイメージを抱かれてしまうのである。ナチスの中央集権体制に自然保護者達が引き込まれてしまった点を否定することはできないが、組織の実質的な自律性はもはや失われていたとされている。「血と土」のイデオロギーは郷土と自然が一体となった保護活動と結びつきやすいレトリックではあったが、ナチス政権は、自然保護ではなく食料の自給自足政策や戦争に寄与するという意味での生産性を重要視していたのである。[41] とはいえ、ワイマール時代以降の歴史及び思想史的構築は今後の課題となりそうである。

おわりに

自然保護の言説は、当初は博物学的な趣味に没頭していた市民階級から直接的に大きく沸きあがってきたものではなかった。上述した森林の管理に携わっていた人々や一部の植物学者によって樹木の保護 Baumschutzの構想が描かれ、博物館に勤めていた植物学者や動物学者、地質学者達は、自然の学問的な価値を検討しながらも、生物種の存続の重要性を世間に訴え続けてきたのである。しかし博物学が徐々に近代生物学へと変貌していく中で、人々の間で博物学趣味はその勢いを弱めていき、特に郷土保護運動においては人々の関心を今一度自然へ向けさせるためには、科学的な知識によるものではなくて、近代化による生活様式や生活風景・習俗などの急激な変容と自然的空間の喪失を合わせて危機として認知していく事が重要であったのである。エーダーの議論では、自然の問題が大きく社会問題として認知されるようになったのは、自然の美的な価値を追求する潮流が自然との融和をテーマ化してきたことに拠るものである、と考察されている。つまりこれは対抗文化は、「自然破壊」の言説を生み出す契機を内包していたという主張であり、郷土保護運動においても同様に人々は美的な関心を通じて風景についての認識を広め、ネットワークを形成してきたことは事実なのである。自然の美に関する言説は真新しいものではないが、特に十九世紀以降の美的な価値は、近代以前の伝統的な社会的習慣や農村の風景、建築物から引き出され、様々な著作や詩を通じて人々に共有されてきたといえよう。

それでもまた、郷土保護運動は近代化に対する反動的な運動にとどまるものではないことも理解できるであろう。自然の美的価値や地域の文化的伝統の保持と結びついた自然保護は、それ相応のインパクトをもって人々の関心を引き起こしたものの、経済的発展に伴う開発に真っ向から対立するだけではなかった。自然の荒廃によりもたらされる経済的発展の危機をも考慮するようによびかけるなど、批判の質を徐々に変化させる事で社会運動の方向性も変化してきたといえるであろう。この批判の質の変化は、博物学から移行した近代生物学的な、あるいはより広く近代科学的による知識や観点が大きく表に打ち出されることで可能になるものである。また歴史家のロルフ・ペーター・ジーファーレ（Rolf Peter Sieferle）が郷土保護運動における懐古主義的な対自然関係の終焉を指摘しているように(42)、自然保護の実践は現在見られる景観設計のように、技術的な管理によってはじめて存続するような近代的な景観作りへと姿を変えてきたことも事実である。このことは郷土保護運動それ自体の近代化とも言い表せるが、近代化の方向性を絶えず修正していく機能を果たしていたとも解釈できるのではないだろうか。フクスの態度からも分かるように、運動の担い手達は、自分達が社会に対して及ぼす影響や自分達の活動が社会にどのように受けとめられるかを少なからず考慮していたことが分かるであろう。

最後に、本論文の問題点及び今後の課題として必要な点について

言及したいと思う。

郷土保護運動はその性格上、文化の保護を中心に据えた活動であり、その中の自然の保護を全面的に取り上げるだけでは、その全体像が捉え切れないのではないかという問題が生じてきそうである。確かに本論文では郷土保護運動の全容を解き明かしてはいない。しかし郷土保護運動を当時の他の様々な自然保護の連盟や活動に比べると、その規模は非常に大きく影響力も強かったのである。よって自然の問題が人々の間で広く共有された背景を考える場合には、逆に郷土保護運動を度外視する事はできないという事情もあり、むしろなぜ自然の問題が郷土保護運動の主要テーマである文化的遺産の保護と結びつきやすかったかを探る事の方が有益だと思われるのである。また市民階級を中心に、聖職者、動物学者、植物学者、森林学者、芸術家、ジャーナリストなど様々な立場の人々のネットワークが形成されていたわけであるが、一般市民と専門家との繋がり方や、政府や役所側に位置する職員や専門家との組織的なネットワークの形成のされ方が、当時の森林の管理の制度的な変容を迎えた時期にどのように進行してきかたをより具体的に探る必要があると思われる。

また方法論についてであるが、ここでは社会運動の変容を考察するに当たり様々な人物の言説を集める方法を取ったが、例えばルドルフ一人についてもその活動に対する態度や関心が、周囲からの影響を受けながらどのように変化してきたかを探るという観点も重要であったはずである。自然に関する思想史を歴史的な背景を基に構成する場合、その素材と概念的枠組みを再度検討すること、及び便宜的な年代区分を設け、時間の流れをより明確にすることも重要であったが、それについても今後の課題としていきたいと思う。

(1) 西村三郎『文明のなかの博物学　上・下』　一九九九年、紀伊国屋書店

(2) Schönichen, Walther (1954) : *Naturschutz, Heimatschutz.* Stuttgart S.42

(3) ヴォルフ・レペニース『自然誌の終焉』山村直資訳、一九九二年、法政大学出版局、一三一頁（Lepenies, Wolf (1978) : *Das Ende der Naturgeschichte.*）

(4) 西村三郎、同書

(5) Conwentz, Hugo (1909) : *The Care of Natural Monuments.* Cambridge S.4-34

(6) Rollins,William(1993):Bund Heimatschutz.Zur Integration von Ästhetik und Politik. In: *Mit den Bäumen sterben die Menschen.* Hermand. Jost (Hg) S. 149-182（『森なしには生きられない』山縣光晶訳、一九九三年、築地書館）

(7) Rollins, William (1997) : A *Greener Vision of Home.* The University of Michigan Press

(8) Rollins, William (1997) : Ibid

(9) Rollins, William (1993) : Ibid

(10) Wieland, C, A (1905) : *Denkmal- und Heimatschutz in der Gesetzgebung der Gegenwart.* S. 47

(11) Wieland, C, A (1905) : Ibid

(12) Fuchs, Carl, Johannes (1904) : Heimatschutz und Volkswirtschaft. In : *Mitteilungen des Bundes Heimatschutz.* S. 17-26

(13) Weiss, Johannes (1986) : Wiederverzauberung der Welt? In:

Kultur und Gesellschaft. Neidhard, Friedhelm Lepsius, M, Rainer Weiss, Johannes (Hg) S.286-301

（14）キース・トマス『人間と自然界』、山内昶監訳、法政大学出版局、一九九七年（Keith, Thomas (1996)：*Man and the Natural World.)*

（15）Eder, Klaus (1992)：Die Ambivalenz des modernen Naturverhältnisses. In：*Humanökologie und Kulturökologie* Glaeser, Bernhard Teherani-krönner, Parto (Hg) S. 89-105

（16）Eder, Klaus (1993)：*The New Politics of Class.* Part Ⅲ

（17）Andersen, Arne (1989)：Heimatschutz. Die bürgerliche Naturschutzbewegung. In：*Besiegte Natur.* Brüggemeier. Franz-Josef Rommelspacher, Thomas (Hg) S.143-157

（18）ヴォルフ・レペニース、同書

（19）Schönichen, Walther (1954)：Ibid

（20）Riehl, Wilhelm Heinrich (1855)：*Die bürgerliche Gesellschaft.* Stuttgart S.263

（21）Rudorff, Ernst (1987)：Heimatschutz. In：*Grenzboten* 56/2 S. 405-406

（22）Rudorff, Ernst (1987)：Ibid S.407

（23）Rudorff, Ernst (1987)：Ibid S.408

（24）Schultze-Naumburg, Paul (1922)：*Die Gestaltung der Landschaft durch den Menschen.* S.12

（25）Schultze-Naumburg, Paul (1922) Ibid S.123-124

（26）Hermand, Jost (1991)：*Grüne Utopien in Deutschland.* S.82-91

（27）Bartels, Adolf (1900)：*Bauer in der deutschen Vergangenheit.* S.142

（28）Bartels, Adolf (1900)：Ibid

（29）Braess, Martin (1912)：Volkskunst und Heimatgefühl. In *Sächsischen Heimatschutz* H.5 Band 2 S.214

（30）Rudorff, Ernst (1987)：Abermals zum Heimatschutz. In：*Grenzboten.* 56/4 S.114

（31）Rudorff, Ernst (1987)：Ibid S.114

（32）Guenther, Konrad (1919)：*Der Naturschutz.* S.24-25

（33）Hasel, Karl (1985)：*Forstgeschichte.* Paul PareyVerlag（カール・ハーゼル『森が語るドイツの歴史』、山縣光晶訳 一九九六年築地書館）

（34）赤坂信「森林風景とメディア」、一九九五年、菅原聡ほか『遠い林・近い森』愛知出版、所収

（35）Jacobi, Hans, Bernhard (1912)：*Die Verdrängung der Laudwälder durch Nadelwälder in Deutschland.* S.149

（36）Fuchs, Carl, Johannes (1904) Ibid S.18

（37）Fuchs, Carl, Johannes (1905)：Heimatschutz und Volkswirtschaft. In：*Flugschriften des Bundes Heimatschutz.* S.20

（38）Conwentz, Hugo (1905)：*Die Gefährdung der Naturdenkmäler und Vorschläge zu ihrer Erhaltung.*

（39）Sieferle, Rolf Peter (1985)：Heimatschutz und das Ende der romantischen Utopie. In: *Arch+*, H.81 August 1985, S.38-42

（40）Conwentz, Hugo (1905)：Ibid

（41）Brand, Karl, Werner (1997)：*Ökologische Kommunikation in Deutschland.*

（42）Sieferle, Rolf Peter (1985)：Ibid

Der Vorgang des Naturschutzes
——besonders die Heimatschutzbewegung in Deutschland——

TAKAHASHI Masaki

In Deutschland des 19. Jahrhunderts sind verschiedene soziale Bewegungen entstanden, die sich mit der Natur beschäftigt haben. Die Heimatschutzbewegung ist eine von diesen. Die Natur, die die Heimatschutzbewegung sich zum Thema gemacht habe, wurde in Form von Naturdenkmälern begriffen. Aber in der zweiten Hälfte des 19 Jahrhunderts ist die Naturkunde, die zuerst Naturdenkmälern entwarf, in Verfallen geraten. Nachdem die Naturkunde nach und nach in verschiedene Fachgebiete und in die moderne Naturwissenschaft übergegangen war, ist sie den Bildungsbürgern fremd geworden. Troztdem spielten die Bildungsbürger die Hauptrolle in der Heimatschutzbewegung sowie andern Naturschutzbewegungen. Wie wurden also die Natur durch die Industrialisierung veränderten Landschaften und die verlorene Natur als Problem wahrgenommen?

Ich versuche den Vorgang der Thematisierung des Naturzerstörungsproblems durch Betrachtung des Diskurses der Heimatschutzbewegung, insbesondere der Begründer Hugo Conwentz und Ernst Rudorff nachzueichen. Ich versuche zu zeigen, dass um den Begriff Naturschutz in einem weiteren Rahmen kömmunizieren zu können, die Bewahrung nicht nur des Interesses für Natur, sondern auch des traditionellen Sinns für Ästhetik über Natur sowie nostalgische kulturelle Identität wichtig war, die auf dem Weg zur Moderne verloren ging. Aber der Naturschutz hat sich allmählich auf naturwissenschaftliche Grundlagen und die moderne Technik gestützt. Letztlich komme ich zu dem Schluss, dass die Heimatschutzbewegung anfangs anti-modern war, aber letztlich sich selbst modernisieren musste. Es ist wichtig, den Veräderungsprozeß der Bewegungen zu berücksichtigen, um deren Verständnis von Natur zu begreifen.

Key Words

Heimatschutz Natur Ästhetik Naturwissenschaft Modernisierung